Second Burial　二番目の埋葬

Second Burial　二番目の埋葬
2011.5.14ー6.11　夢創館（神戸）

このインスタレーション作品は、2011年3月11日の原発事故後、その被害が拡大する時期に制作された。タイトルの「二番目の埋葬」は、3.11の福島第一原子力発電所の破壊・死（最初の埋葬）から、遠い未来における廃炉（二番目の埋葬）への長い道のりを暗示する。これは1995年開催の「第6回福井ビデオビエンナーレ」での発表作品「Innocent　Babies」の福井県立美術館での展示部分「埋葬」を受けたものでもある。

■作品形態

①「鉄製ベッド」、それを取り囲む１脚の椅子と、数十個のミニチュア椅子の列など、幾つかのオブジェからなる光景、②それらをリアルタイムで撮影する二台の移動・回転するカメラ、そして③二つのカメラからのリアルタイム映像と既撮影映像が合成処理され、壁面に投影される映像。作品はこれらの複合的な三要素で構成される。

中央の鉛製の円形テーブル上に、鉄製ベッドと椅子が配置される。
右側面、左円形壁面に、ミニチュア椅子の配列。
上下に移動するビデオカメラがリアルタイムに右壁面上のミニチュア椅子の配列を撮影する。
その映像が 正面にプロジェクターで投影される。

右壁面、ミニチュア椅子、ビデオカメラからの視線。（写真右側が床面）

右壁面、ミニチュア椅子のリアルタイム撮影映像。この映像に既撮影の映像が重ね合わせられる。

鉛で覆われた円形テーブル、割れ目から草が伸びる。子ども用鉄製ベッドと、それを見守る白い椅子。天井からビデオカメラが回転しながらリアルタイムで俯瞰撮影する。
背後の円形壁面にミニチュア椅子の配列。

作品に向けてのテキスト（KOSUGI+ANDO)

Fukui - Fukushima

2011年3月11日、東北三陸沖でマグネチュード9.0の地震が起こり、沿岸に津波が押し寄せる。福島第１原子力発電所が損傷を受け、炉心冷却機能が停止した。炉心溶融、水蒸気爆発、放射性物質の飛散、海上への汚染水流出など一連の事故連鎖が始まり、現在も続いている。このような状況の中、作品展示プランは、コンセプトからの変更を迫られた。体内あるいは脳内の一部が福島のあの空虚な場所で占められると共に、以前、福井で制作した作品のイメージが蘇ってきたためである。
1995年8月、「第６回福井ビデオビエンナーレ」において、私たちは福井県立美術館と図書館の二カ所で「INNOCENT BABIES」という作品を発表した。原発をテーマとし、福井県内にあった15基の原子炉をモチーフとしたものである。コンクリートタイルが、チェルノブイリ型の炉心を模して床に円形に敷き詰められている。その中心に置かれた鉛の棺を15台の鉄製のベビーベッドが取り囲む。1986年のチェルノブイリ原発事故では、初期消火に駆けつけた7名の消防士が被曝し、高濃度の放射能汚染によって、死体をそのまま土に埋葬することができず、その棺が鉛で覆われた。またヨーロッパ中に放射性物質が広がる中、出産を拒否する女性たちの運動も起こる。 ヒトによってつくられたテクノロジーがヒトの出生や死のありかたまでを変えていくという事態は、反対・推進を語る以前に考えられるべきことのように思われた。それから15年たち、今回の原発事故は一種のデ・ジャヴュに近い感覚を私たちに与えた。事故情報の裏側で進行する非常事態、作業員の被曝、汚染された土地に残る人…、何も変わっていなかったのでは、という思いが残る。

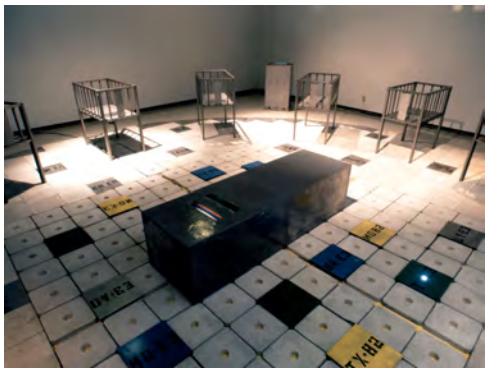
「INNOCENT BABIES」(1995)は、チェルノブイリ原発事故の記憶を作品という場に重ね合わせるものだった。今回の作品「Second Burial」では、既に原発事故を生みだし、その映像や言葉が私たちのまわりを飛び交う中、私たちの立ち位置は異ならざるをえない。それは、進行する事態から少し距離をとること。テーマとなる対象を遠ざけつつ近づけるという、両義的なアート表現の可塑性に身を置くことでもある。

Second Burial

津波災害と原発事故は日常と隣り合う死を私たちに思い起こさせた。津波災害では、ある瞬間の切断によって世界が裏返り、少しの場所の違いによって生死が分かたれる。他方、原発事故では、日常はおだやかに死に浸透される。日常の風景が、気づかぬ間にその意味を変える。土を覆う雑草は、人の触れることのできないものとなり、還るべき場所は、戻ることのできない空白の場所となる。また津波災害は空間的に人間的な尺度を超えたが、原発事故は時間的に人間的尺度を越える。事故の経過は長期間持続し、終結は何十年も先に延ばされる。セシウム137の半減期は約30年、プルトニウム239 は2万4千年という。ヒトの想像力はまだまだそれに追いつかない。

「殯（もがり）」という期間がある。 最初の埋葬と二番目の埋葬（Second Burial）の間に、死体の分解・腐敗が進行する。 死体が人の生活に影響を及ぼさない物質へと変化するまでには、ある一定の期間を必要とする。 私たちは事故を起こした原発に長い殯の時間を与えなくてはならない。そして日本各地に散在する他の50基の原発、それら「無垢なベイビー達」を最初の埋葬へと、送り出す必要があるだろう。ゆっくりと視線は汚染された土に向かう、 そこもまた昼と夜、季節の繰り返しの中で息づいている。 ヒトがその限界を抱えつつ思考し想像することを促す、再生の場所である。

2011.4.11



「INNOCENT BABIES」(1995)

静物配し問う 文明と原発

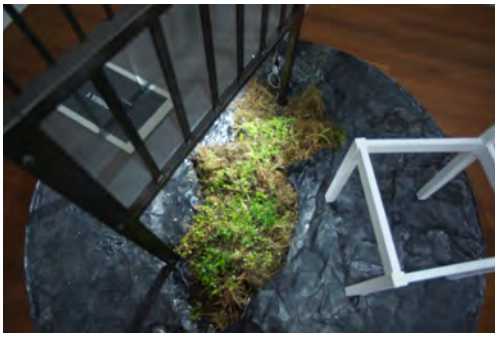
手塚さや香

福島第１原発をテーマにした「Second Burial」（２番目の埋葬）が１１日まで神戸市灘区の夢創館で開かれている＝写真。95年に福井市でチェルノ・ブイリの事故や福井県内にある原発についての作品を発表したアート・ユニット・KOSUGI+ANDOの新作。　当初予定していたテーマと会期を変更し、端正でひっそりとした空間の中で人間と文明、自然について考えさせるインスタレーションだ。

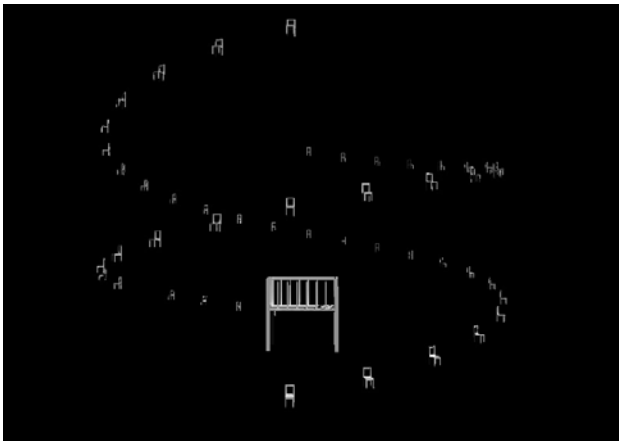
95年の「INNOCENT BABIES」（無垢な赤ん坊、の意）は、チェルノ・ブイリを棺おけ、福井の原発15基を鉛のベビーベッドに見立てた。（※１）今回の「Second Burial」は、福島第１原発をベビーベッド、人間を椅子になぞらえ、原発を想起させる具体的なモチーフを極力排した。それが逆に鑑賞者を深い思索に誘う。死者の埋葬のように容易に自然に返すことのできない原子力のありようや人間の想像力、ものの見方について問いかける。

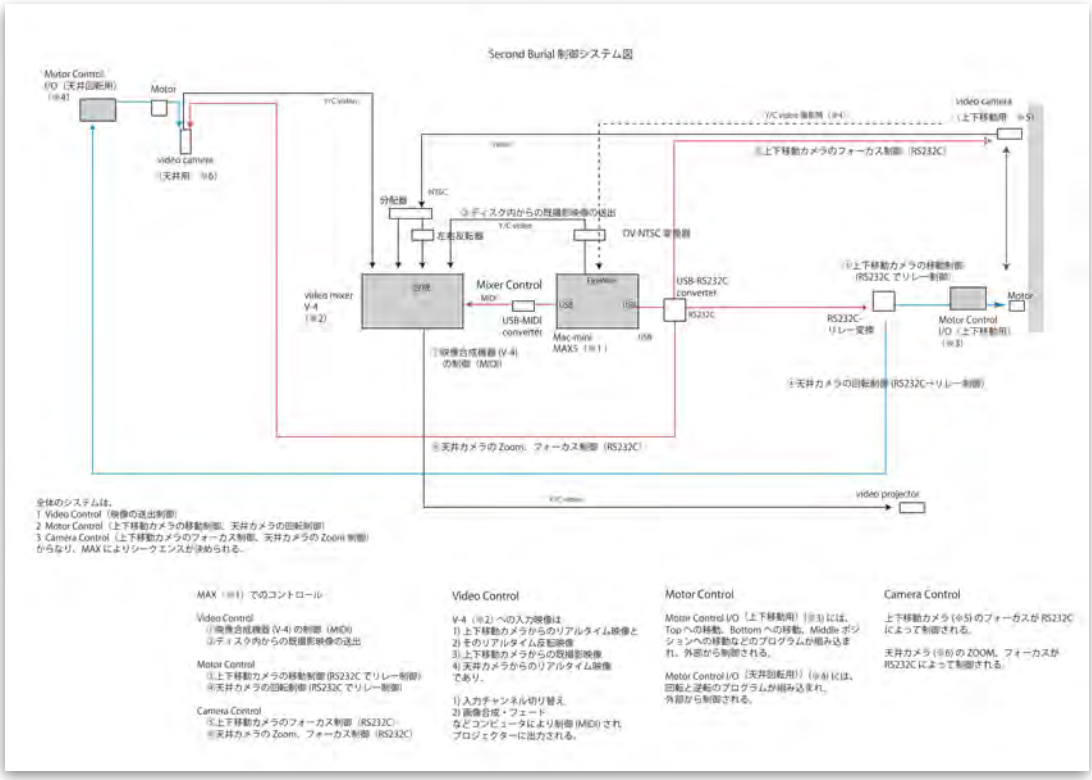
（毎日新聞　2011年6月8日（水）夕刊）

※1　正確には、"鉛"で覆われた棺はチェルノ・ブイリ原発事故で死亡した消防士の棺を暗示しており、円形の床の形状が炉心を模している。また、"鉄製"のベビーベッドは、県内の原発であると同時に、チェルノブイリによる放射能汚染を避けるために、生まれなかった赤ん坊を暗示していた。(K+A)



【参考・プランニングデータ】



プランニング・データ
円筒状壁面、椅子配列シミュレーション3D

プランニング・データ
壁面、椅子配列
カメラ撮影シミュレーション 3D